

さる中学受験情報誌の取材用資料として*

吉川 敦

久留米大学附設中学・高等学校 校長

目次

1	はじめに	2
2	昨今の日本の状況	2
2.1	東日本大震災	2
2.2	中学一年生オリエンテーション	3
2.3	建学の趣旨	4
2.4	板垣政参先生	5
2.5	校歌の歌詞	5
3	これからの附設について	6
3.1	予定調和の破綻	6
3.2	混乱もあった	7
4	異なる描像の可能性	7
4.1	仮想的二元論	7
4.2	責任感ある勇士と無責任な卑怯者	8
4.3	理想の人間像	8
4.4	我々にできるのは何か	9
5	半生の反省	9
5.1	人の一生は無風ではない	9
5.2	わたくしと小波乱	10
5.3	フランスでは	11
5.4	五月の出来事	11
5.5	分析1－何が起きていたか	12

*取材は、先方のシナリオに従ってなされる予定である。したがって、出来上がったものは、この記事とは恐らく似ても似つかないものになるに違いない。とは言え、先方に本稿とほぼ同じものを参考にすべき基礎資料としてお渡ししてある。その意味では、本稿は現勤務先の事情にやや踏み込みすぎているところがあり、しかるべき留保は必要である。校長任期を一期終えたところでの感想とお考えいただくと幸いである。

5.6	分析2 – 収束過程	13
5.7	分析3 – 事後の誠実な処理	14
5.8	分析4 – 原資料の収集と保管	14
5.9	プラハの春の終焉	15
6	帰国後	15
6.1	北海道大学 → 九州大学	15
6.2	工学部	16
6.3	数学者集団と戦略性	17
6.4	カルチャー・ショック	17
7	これからの本校	18
7.1	校長になる	18
7.2	附設体験	18
7.3	エリート養成とは何か	20
7.4	エリートと社会的指導層	21
7.5	生徒に望むこと	22
8	ささやかな補遺	23
8.1	カルチャーショックの事例二三	23

1 はじめに

さる中学受験情報誌の編集部から、取材依頼があり、わたくしについて

今までの半生をお聞きしながら学校運営についてや夢、どんな生徒に育って欲しいか等をお聞きします

とのことでしたが、省みればお話しするほどの半生はないとつくづく感じます。しかし、校長は、当人自身が語るほどの半生はないと思っていても、生徒たちから見れば具体的な規範性のもとになる存在ではあります。後述しますが、校長の理想とする人間像との関係で、過去の校長先生たちの話も交えながら、漏らして参りたいと思います。

2 昨今の日本の状況

2.1 東日本大震災

その前に、昨今の日本の状況を思いますと、決して本校だけのことではないのですが、ここまでの日本の教育には大いに問題があったと思わざるを得

ません。それは何であり、また、改善法があるのか、あるとしたら、どういうものを巡って、いろいろと考えるようにはなってはおりません。特に、東日本大震災やその事後の処理が今後の世界に及ぼすであろう影響についての評価をわたくしなりに試みておりますが、最低限、この大震災がこれからの日本の種々の構造を全く変えてしまうことになるだろうとは言えるのではないのでしょうか。直接的には大震災が広範囲大規模のものであったことに拠りますが、より深く考えさせられることがあるからです。

今回は非常に厄介な形で東京圏が大震災の当事者になってしまいました。そのために、東京圏にあって日本を仕切っているはずの人たちの資質や見識・素養が、国内はもちろんです、国際的にも、完全に顕わになったと思います。そして、残念ながら、評価は決して高いとは言えないようです。日本で最上級の学校歴（がっこうれき）の人たちのはずなのに、どうしてこんなことになってしまったのか、一体、日本という体制（システム）はどうなっているのか、そういう深刻な発問を避けるわけには行かなくなったと思います。しかも、こういう最上級の学校歴の人たちと本校は無縁ではありません。実際、本校の出身者に大震災の処理に深く関与している人たちもいないわけではありません。かれらが、こういう学校歴の人たち一般と同じような文化を是とすることは決してなかったらうとなると、直ちには確信が持てません。もちろん、後で触れるつもりですが、本校の建学の精神や校歌の歌詞がしっかりと身につけていけば、いずれ地力を発揮してくれるものと期待したいと思えます。

2.2 中学一年生オリエンテーション

ところで、四月第一週の新中学一年生のオリエンテーションの中には、九重高原¹での泊まり込み研修が含まれており、最初の夜は、校長として生徒に話をしました。わたくしは、校長に赴任して四年目になりますが、初めての年は非常に忙しく泊まり込み研修に参加する余裕はありませんでしたが、二年目から最初の一晩だけは参加するようにして、今年は三回目になります。校長が何か一言というのは毎年のことですが、ことしは、担任の先生たちの意向もあり、三十分もの時間を使わせてもらうことになっていました。そこで、生徒たちから「校長先生は学校で何をされるんですか」とよく聞かれることを思い出しながら、

本校の校長とは何をする人間か

という話をしてみました。

改めて考えてみると、これはなかなか難しい話題です。理念的な側面と技術的な側面がありますが、本校のような私立学校の場合には、特に、理念的な面の確認が要るでしょう。そういうこともあって、

¹大分県の山岳域にあり、阿蘇山系にも連接する風光明媚な地帯です。

附設のような私立の学校では、校長は、自分が理想とする人間像に一步でも近づくように生徒たちを育てることができるし、また、そうすることが校長の務めである

と言いました。当然、校長がどういう人間像を理想としているかを明らかにしておかなければなりません。その上、実際に生徒たちの教育に当たる現場の先生たちが、校長の抱く理想の人間像を共有していなければ、また、話にならないこととなります。もちろん、生徒たちには、

先生たちと校長は、君たちをこう育て上げたいという理想像は共有しているし、校長は、先生たちを信頼して、君たちの教育に当たっていただいている

という趣旨のことを明言しました。

2.3 建学の趣旨

そこで、校長の理想の人間像というのは、これをどうしても説明しなければなりません。特に、校長が変な理想など抱いていないということは、はっきりさせなければなりません。本校のような古い学校になり、わたくしのように、何代目かの校長になりますと、先生たちがすでにおられるところに、校長として加わるということでもあり、学校が伝統的に掲げてきた理想像と個人としてのわたくしの理想像が整合していないと、先生たちとの理想像の共有が確立できているかを含め、非常にややこしいこととなります。建学の趣旨や校歌の歌詞が非常に重要であるのは、こういう理由です。

本校建学の趣旨ですが、昭和二五（一九五〇）年、開校時の初代校長板垣政参（いたがきまさみつ）先生は、

国家・社会に貢献しうる誠実にして気概ある人物

を理想とされ、そのような人物の育成を本校の建学目的とされました。中学創設時の校長原巳冬（はらみとう）先生は、重要な語句、「為他」を加えられて、

国家社会に貢献しようとする、為他の気概をもった誠実・努力の人物

を理想に据えられました。高度成長期の社会の風潮を前提に、篤実な教育者であり、禅に傾倒されていた原先生のお考えが伝わってきます。「為他」という句は、道元和尚の『正法眼蔵』にあると聞いていますが、禅語というより、字の並びから素直に意味を受け取りたいと思います。この「為他」という句によって、人はどう生き、なぜ勉強しなければならないか、という根本がはっきりしたわけですが、かつては敢えて言わなくてもよかったことでも、確認しておかなければならない時代になっていたということでしょう。「為他の気

概」こそ、本校生徒の抱くべき志の源流にあると思います。原先生は、さらに、非常に詳しく、こういう生徒を育てたいという教育方針を定めておられます。本校のホームページ²に「建学の趣旨」として載せてあるのが原先生に拠る改訂版です。

2.4 板垣政参先生

板垣先生は、南部藩士の末裔で、仙台の第二高等学校在学時に受洗されて以来、終生、誠実なクリスチャンでした。先生の医学研究・教育者としてのキャリアは、今の九大医学部の前身である京都帝国大学福岡医科大学が出发点で、その後、九州帝国大学医学部教授（生理学）を務められました。人物については「神のようなお人だ」と同僚たちに評されていたそうです。お墓は福岡市内の平尾霊園にあります。

南部藩は戊辰戦争の敗者でした。後裔である岩手県人は、明治期に大変苦勞し、恐らくは薩長何するものぞという面もあったかとは思いますが、独特の負けじ魂で、信じがたいほどの多くの人材を産み出しました。本校が九州筑後にありながら、南部盛岡の会鉢を継いでいると言えることは、特に、大震災の今の時期、大変貴重なことだと思います。なかでも、盛岡中学（岩手県立盛岡第一高校の前身）には俊秀が集い、板垣先生もそのお一人です。板垣先生のご兄弟には高名な軍人もおり、刑死した板垣征四郎元陸軍大臣は弟になります。先生ご自身も、大戦中、軍属として占領下のジャカルタ医科大学長を務められ、敗戦後、しばらくは公職追放に遭っています。旧制久留米医科大学から新制久留米大学に移行する際、新制高校を併設することになって、久留米大学附設高等学校が誕生し、板垣先生が初代の校長になりました。先生のキャリアには中等教育での経験はありませんから、当時の久留米大学長であった先生のかつての同僚であり盛岡中学の同窓の小野寺直助先生との縁故もさることながら、日本の行く末についての先生の強い想いがすべてに先だっていたのだらうと思います。板垣先生の、文字通り、波乱万丈の人生は、戊辰戦争以来、平成に至る日本の変転と重ねて、象徴的な意味もありましょう。先生の評伝は書かれていてしかるべきだと考えていますが、残念ながら、まだ、ないようです。今日の日本は先生の想いとどこかで食い違っていると思いますが、いつごろからなのか考える価値はあるでしょう。

2.5 校歌の歌詞

建学の趣旨と板垣先生のお話を致しました。校歌ですが、歌詞はホームページに記載しています。創設時に漢文を担当された大石亀次郎先生の作詞ですが、

²<http://www.mii.kurume-u.ac.jp/fusetsu/>

いかにも漢文調で、高踏的で、かつての旧制高等学校の寮歌などを彷彿させます。このうち、三番の歌詞

修羅道の世を救うべく 平和の偉業任として
築く不朽の真善美 見ずや我等の大使命

が、先の板垣先生の「国家・社会に貢献しようとする」ことの内容に踏み込んでいる部分です。実際に、卒業生の人たちから、人生選択において、この校歌の一節が指針になったというお話をいくつも聞いています。また、最近では、同窓生の間で、東日本大震災の被災者支援活動をこの精神で行って行こうという呼びかけがなされています。

建学の趣旨も校歌の歌詞も、愚直と言われてもおかしくない直截さで表現されています。歴代の卒業生たちと話して感じるのは、この一種独特の「筋の通った愚直さ」が本校の特徴なのだ、ということです。こういう愚直さはぜひ今後も守り伝えていきたいと思えます。

3 これからの附設について

3.1 予定調和の破綻

さて、これからの本校のことですが、東日本大震災は非常に難しい問題をわれわれに付きつけていると思います。わたくし自身は、大震災の結果、日本の社会が今まで当然視してきた前提がほぼすべて崩壊してしまったという直感を福島第一原子力発電所の一号機建屋爆発の時点で覚えました。平成二二年度の中学の卒業式や修了式の式辞類³には、思うところがあって相当にきつい表現に満ちてはいますが、大震災の評価自体は時期尚早で触れてはけません。今年度の入学式の告示や始業式の式辞⁴には大震災の影響評価を基調として盛り込みました。

要するに、長い間、暗黙裡に前提になっていたのは予定調和の安定した日本で、このため、ずいぶんと安易なことが行われてきても目立たなかったと思います。もちろん、この予定調和という前提そのものがおかしいと言ってしまえばそれまでですが、とにかく、今後は、完全に不安定な日本と世界を前提に、われわれは生徒の教育に当たらなければならないし、生徒や生徒の保護者の皆さんにも、そういう転換をよくよく認識しておいてほしいと思います。ちなみに、これらの式辞類は本校のホームページに貼ってあります。わたくしの赴任以来の式辞類は、それぞれの年度のところに貼ってありますが、今年度のものが一番厳しくなっていると思います。

とは言え、具体的な教育の実際となると、これは今までと変える必要は基本的にありません。ただ、生徒たちに、今まではあったかも知れない、口を

³本校ホームページの昨年度の当該箇所の記事に貼ってあります。

⁴本校ホームページの今年度当該箇所の記事に貼ってあります。

開けて上を向いているとご馳走が降ってくるというようなことは、今後は決してないことは知っておいてほしいと思います。このことは本校の場合に限りません。幸い、本校の場合、卒業生が上述の建学の趣旨や校歌の歌詞の精神をきちんと身に付けているならば、そして、そういうかれらは自らの力で道を拓いてきましたから、これからも、そうであるに違いないと思います。

3.2 混乱もあった

ただ、本校の歴史を遡ってみると、いつも順風満帆というわけでもなく、また、建学の趣旨がきちんと生徒たちに伝えられていたかも定かではありません。最近では少なくなりましたが、わたくしの校長赴任時には、

お宅の生徒の乗車態度が悪かったので注意したら「うちは勉強さえできれば後は何をしたらいいんだ」と不貞腐れた。お前たちは一体どんな教育をしているのか

という苦情の電話がよく校長室にありました。中には同窓生であることを名乗られての苦情もありましたから、正直のところ、最近この学校はどうなってるんだと思わないでもありませんでした。本校の歴史を調べ、「為他」を強調した建学の趣旨をしつこいほど口にするようになったのは、生徒たちに自己中心の安易な傾向に染まらないようにしてほしいという気持もありました。

4 異なる描像の可能性

4.1 仮想的二元論

建学の趣旨の他にも、「和而不同」、「自主自律」といった四字熟語の標語が本校にはあります。「自主自律」は、多くの学校でも唱えられていることであり、ことさらに説明の必要はないと思いますが、「和而不同」は説明が要るでしょう。この句は、『論語』子路篇第一三章にあり、「君子」の要件として「小人同而不和」と対比されています。板垣先生が強調されたと伝えられており、先生が認められた「和而不同」の色紙が残されています。生徒たちがそれぞれの個性を発揮しつつ仲良く過ごせという趣旨と受け取るのが素直な理解だと思います。

しかし、やや違う描像が可能ではないかと思います。特に、建学の趣旨や校歌の歌詞との関わり、そして、わたくし自身が掲げたい理想の人間像と関係づけるためには、この描像を示しておかなければならないと思います。わたくしは数学者ですので、仮想的な極端な想定に基づく二元論的な議論には慣れていません。一般の方には違和感があるかも知れませんが、しばらくお付き合いください。

4.2 責任感ある勇士と無責任な卑怯者

「責任感ある勇士たち」の集団と「無責任な卑怯者たち」の集団とを対比してみましょう。「勇士」と言い、「卑怯者」と言いましたが、いずれもそれなりに知識技能を備え、能力も高い人たちだとします。現代日本で言えば、最上級の学校歴の人たちだけを、この場では、念頭に置いていると考えてください。やや具体的なイメージとしては、最上級の学校歴の人たち向けの椅子の列が、責任感や勇気の程度に応じて東西に並べられており、その並べ方は、東側の端には、「責任感ある勇士たち」と評される人たち向けの椅子があり、西側の端に、「無責任な卑怯者たち」としか呼べないような人たち向けの椅子が来るようになっているとしましょう。そして、最上級の学校歴の人たちにそれぞれの席に座ってもらいましょう。最上級の学校歴の人たちが東西一列に並ぶでしょう。責任感や、勇気は、学校歴とは無関係ですから、東側の端の方に空席が目立つかも知れません。しかし、それでは余りにも情けないことになります。

わたくしは責任感と勇気を備えた人物を理想としたり、生徒たちには、そういう人物を目指してほしいと考えています。ただ、勇気といっても、無謀なものでは困ります。特に、本校が産み出して行きたい現実的な人物像と重ねますと、それぞれの専門分野での卓越性はぜひとも期待したいところです。しかし、専門分野以外のことに関して判断停止状態になるようでも困ります。何事であれ、大づかみに本質を洞察し、的確に勘が働くような、そういう能力は絶対に備えてほしいと考えています。責任感も、こういう能力と密着しています。実際、なすべきことに対峙したときに、直接的な問題だけでなく背景までもが同時に把握できれば、自分の役回りはほぼ瞬時に判断できましょう。当然、適切な行動が伴い、責任は自然に果たされるはずですが、こういうことは向いているとかいないとかの話ではなく、本校の卒業生には、そういう形での活動を期待しているという意味のことです。

4.3 理想の人間像

まとめると、わたくしの掲げる理想の人間像は、とりあえず、「何事であれ、大づかみに本質を洞察し、的確に勘が働くような、そういう能力を備えている責任感ある勇士」ということになります。このままでは倫理的な価値観が見えてきません。責任感とか勇士は倫理を含みますが、倫理的な価値ではありません。しかし、勇気や責任の源泉には倫理上の価値がなければならず、それは、公正性の実現と維持としてまとめられるべきものを指すと思います。

4.4 我々にできるのは何か

このような人間的な総合力は在校中には身に付けられるものではありませんが、萌芽を仕込むことはできます。それを社会に出てから成長させ鍛えていくことが大事で、何よりも、まず、各自に、そのような意志や心掛けが整っているかどうかの基本になるでしょう。そして、萌芽、つまり、この意志や心掛けこそ、中等教育で身に付けさせることができるものですし、本校では、ぜひ、そうしたいと考えてきているわけです。おそらく、どの学校も変わらないと思います。ただ、具体的な技術的な方法論となると、非常に難しいのが事実です。組織的な教育法は多分ないでしょうが、理念性の高いことでもあり、的確な指針を示しておくことは必須だと考えています。そして、日常の学習活動をやや距離を置いて見詰めることができる機会、部活動、生徒会活動、あるいは、ある種のボランティア活動などが重要な契機になるのではないのでしょうか。

本稿の最初の方で、東京圏にあって日本を仕切っているはずの人たちの資質や見識・素養については、残念ながら、内外での評価は決して高いとは言えないようだと申しました。これはどういうことか。先の言葉を用いると、ここ四半世紀の日本の教育は、どちらかという、結果的に、「責任感ある勇士」よりも「無責任な卑怯者」に近い人たちを大量に産み出してきてしまったからではないか、と思います。最上級の学校歴の人たちのことですから、落ちこぼれなどの問題ではありません。おそらくは、予定調和を信じこんでの安易さが原因だと思います。社会に出てからも成長することが少なかったということかも知れません。どうしてこういうことになってしまったのか、事態はこれから改善できるのか、それはすぐにはわからないことですが、とにかく、このままでいいわけではありません。できるだけ早く直さなければならぬことではあります。

5 半生の反省

5.1 人の一生は無風ではない

今回の東日本大震災もそうですが、考えてみれば、人は一生の間に、ほぼ必ず、直接間接に、とんでもない事件や災害に遭遇します。父の場合は、関東大震災と太平洋戦争という大きなものがあり、その間にも種々の事件があったようです。ただ、大学を出てから戦争までのほとんどの期間は、中世美術史研究者として滞仏していたせいでしょうか、昭和十年代前半の日本のことについては実感はなかったようです。いずれにせよ、関東大震災の記憶から見れば、戦時中の空襲にせよ、艦砲射撃にせよ、予め予想の付くものだから怖いという感じはなかったと言っておりました。

5.2 わたくしと小波乱

わたくしの場合は、生まれてからこのかた比較的何事もなく過ごしてきたな、と思いますが、一方、この間の日本や世界が平穩無事というわけではありませんでした。考えてみると、わたくしの場合なら、ものごころついてからでも、朝鮮戦争やベトナム戦争と近隣の戦争が続いていましたし、それが、また、国内外に種々の形で波及してきていました。わたくし自身が直接関わったことではありませんが、高三のときは、六〇年安保闘争といわれるものがあって、大学生はもちろん、都内の高校生も連日のようにデモに繰り出していました。それは、日比谷とか西といった、当時、東大に大量の合格者を出していた都立名門校の生徒たちも例外ではなく、むしろ、そのような水準の高い高校生だからこそ、デモに繰り出していたのでしょう。わたくし自身は地方の私立高校生でしたから、関心はありましたが、行動の意志は持ち合わせてはいませんでした。確か、6月15日だったと思いますが、デモ隊の国会乱入事件と言うのがあり、その渦中で、当時の東大文学部の女子学生が亡くなりました。安保闘争自体は、羽田空港での八ガティー特使立ち往生事件や、強行採決、引き続く岸信介首相の退陣などを経て、収束して行きました。この樺美智子さんの死については、なかなか納得のできる解釈がわたくしの頭の中でまとまらず、どうやら解決を付けたのは大分時間が経ってからでした。岸氏退陣の後には、池田勇人首相に代わり、下村治氏をプレーンとする所得倍増計画（高度成長政策）が策定され、世の中の雰囲気は急速に変わって行きました。

わたくし自身は、地方の私立高校でしたから、安保闘争に直接的に関与したわけではなく、したがって、まあ、無事に、翌年春、東京大学に合格しました。理科一類にしようか文科二類（現在の文科三類）にしようか逡巡した記憶がありますが、最終的には、理科一類にしました。振り返ってみて、それでよかったのかどうかわかりません。父は在仏中で長期不在でしたし、相談したところで役に立ったかどうか。ただ、十分な動機があったのか、本当に自由にもの考えての判断だったのかどうかとなると悔いが残らないと言ったら嘘になります。とにかく何も知らなかったのです。

当時は、一次試験が三月三日、英数国の三科目で行われ、合格者は、三月八日九日に二次試験を受け、二十日ごろに最終的な合格発表があったと思います。この十日余りは非常に鬱陶しい気分であったことを覚えています。一校しか受験しませんでしたから、落ちたらどう浪人生活を送ることになるのか予想も付かず、ひたすらくよくよしておりました。今から考えると、性格的なこともあったのですが、こういう時期の過ごし方としては実にくだらないことではあります。

5.3 フランスでは

安保闘争終結後の大学構内は静謐でしたが、ベトナム戦争がエスカレートし、いわゆる北爆が始まっていたのではないのでしょうか。ともかく、もっと自発的な勉強をしておけばよかったと後悔する学部時代を経、修士課程を修了してから、フランス政府給費留学生として、パリに行き、パリ大学エコール・ノルマル・シュペリールなる学校の寄宿舎に一年近くおりました。このころは、東欧圏では社会不安が広がっており、ポーランドでは造船労働者の蜂起から始まった連帯運動の結果、首席交代があり、チェコスロヴァキアではプラハの春と言われる自由化運動が進行しつつあり、そして、ワルシャワ機構軍がチェコスロヴァキアとソヴェト連邦の国境沿いに演習と称して軍事展開していました。一方、西欧圏では、イギリスでは山猫ストと言われた突発的な労働争議があちこちで起き、それがフランスにも飛び火して、ルノーの工場や、近いところでは、地下鉄やバスの争議が頻発していました。ドイツやフランスの大学では、それぞれに原因は違うのですが、学生ストが起き、特に、パリ郊外のパリ大学ナンテール校は学生運動のメッカともいえるべきところとなり、指導者のコーン・ベンディットたちの名前や映像を連日のように、目にしました。このコーン・ベンディット氏は、今はEU議会の有力議員として活躍しているようです。そして、日本では、東大医学部紛争がもとで、全共闘運動が展開されていったようです。ただ、これはわたくしの在外時期と重なるために、わたくしにはまったく実感がありません。帰国した後で、東大や京大、あるいは、北大の校内に当時の名残はありましたし、御茶ノ水駅を降りてすぐの明治大学のキャンパスには、ずいぶんと長い間、そのころの余波が留まっていたと思います。安田哲の落城はTVニュースで見ました。そう言えば、中国では文化大革命の真っ最中ではなかったでしょうか。エコール・ノルマル・シュペリールにもマオイスト（毛沢東主義者）はいました。

5.4 五月の出来事

さて、フランスですが、ゼネストの呼びかけがなされ、五月の出来事（エヴェンヌマンドメ）が展開されました。最初に大きなデモがあったとき、確か、寄宿舎での夕食後だったと思いますが、あちこちから爆発音が聞こえてきて何か起きているとは思いましたが、何が起きているかはわかりませんでした。火炎瓶が投げられたということではなかったようで、ご承知のように、欧州の街路は片側に駐車列がありますが、デモ隊が車に火を付け、そして、ガソリン・タンクが爆発し、それが連鎖的に続いていたようです。もちろん犯罪行為ですが、以後、デモの可能性のありそうな道路には駐車する人はいなくなりました。最初の頃は、パリ市内の各所の道路で、バリケードが築かれ、敷石を剥ぎとって投擲され、機動隊とデモ隊の戦闘が繰り広げられまし

た。この様子を危険を承知で何回か見に行きました。もっとも外国人の我々は何かあると非常に不利な立場に置かれる可能性もあると思い、デモ自体からは距離を置いていました。この五月の出来事は結局ド・ゴール大統領の退陣とアイルランド亡命によって幕を閉じるのですが、経過を思い起こしてみると、いろいろと参考になることが多かったように思います。

5.5 分析 1 – 何が起きていたか

第一に、ゼネストによって近代国家も外界から途絶されることがあるという事です。このときのゼネストでは、鉄道や地下鉄、バスなど公共交通機関が全部止まり、空路も閉鎖されました。郵便もなくなりましたし、放送や電気水道の類は確保されていたと思いますが、平時の何割くらいの機能が維持されていたのでしょうか。これらは政府の管理下にあったと思いますが、公務員もストをする権利があり、実際、一部はストに入っていました。恐らく、国民生活の最低限を保障することは、こういう場合でも義務付けられていたのだらうと思います。国の機関であるエコル・ノルマル・シュペリウールも閉鎖され、毎朝の部屋の掃除がなくなったのはともかく、食堂が閉鎖されたので、フランス人学生はほとんどが帰省してしまいましたが、残っているわれわれは食事のために開いているという学生向けの公設の大学食堂 (Restau-U) を探して歩きまわることになりました。大学が閉鎖されたのは当然かも知れませんが、講義機関であるコレージュ・ド・フランスも閉鎖され、セミナーに集まることができた聴衆相手に主催の教授が、今まで 500 年の歴史でどのような動乱のときも閉鎖されたことがなかったのに、このたび始めてこういうことになった、と嘆いたのを覚えています。これは都市の構造が変わり、かつてのように研究者のほとんどが内部居住者が徒歩数分以内の居住者であった時代と違い、地下鉄やバス、自家用車で通うようになったために外界の影響をもろに被るようになったということでしょう。いずれにせよ、基本的に外界と途絶し、しかも、交通機関が止まっていたから、郊外の大学都市に住んでいた日本人研究者たちとの交際もありませんでした。実は、エコル・ノルマル・シュペリウールには、わたくしと同時期に、東大仏文出のプルーストの日本人研究者がいましたが、昼夜逆転の生活をしており、食堂が閉鎖されてしまうと全く会うことがなくなり、一体どうしていたのでしょうか。この頃、東京での集会で父に会い、ベルギーからバスでパリに戻ったというフランス人が、父からことづかったというメッセージを届けてくれました。わたくしが直接受け取ったわけではないので事情は不明でしたが、とにかく、父は、今のフランスは生命の危険はないから安心して推移をよく見ておくように、と言ってきました。父は 1930 年代のフランスと 1950 年代末のフランスにおりましたので、政治テロを伴う社会不安と五月の出来事の違が見えていたのだらうと思います。

5.6 分析2 – 収束過程

第二は、人の心は移ろいやすいものだということを実感できたことです。ゼネストに入った当初は、デモ情報があると、街角には、自動小銃を構えた制服の憲兵隊が並びましたが、概してデモは平穩整然と行われていました。ゼネストと言っても数日で終息するだろうと思われていましたし、一方で、労働条件や社会参加条件などの中央交渉が行われ、全体としての統制感がありました。さらに、自動小銃で武装しているかのように見える憲兵隊は介入意思を持っていない、装填されていないからこそ小銃携行なのだという話でした。それが、スト団体の統制が破れ、夜、街路にバリケードが生まれ、敷石の投擲が始まると、憲兵隊は消え、厚手のコートに身を包み、介入用の盾と警棒を持った地域治安部隊（CRS）に替りました。モロトフ・カクテルといわれた火炎瓶と催涙弾も飛び交いました。グルナード・ラクリモジェン（催涙弾）などという言葉覚えてたりしたのも、このときです。この騒ぎは、エコル・ノルマル・シュペリウールの周辺の道路でもありましたから、寄宿舎の窓を突き破って催涙弾が廊下に転がり、大変な目に遭ったこともあります。恐らく、政府は、一方で、情報機関を通じて、統制外のデモの実態を調べていたのだらうと思います。これは、その頃、よく街をチェコ人の寄宿生と一緒に歩きましたが、いたるところで議論に人が集まっていた、まあ、われわれも時折加わって口をはさむことがあっても、少し経つと、かれは勸を働かせて、もう行こうと言うことがありました。今、来た奴、見たろ。あれは私服だ、社会主義国家で育てば誰だってわかることさ、と言うのです。こうして政府は間合いをはかっていたのでしょう。あるとき、動員された工兵隊が主要な道路の敷石の上にアスファルトを被せてしまいました。ブル・サンミッシュ、サン・ジャック、ゲイ・リュサック、コルムなど、エコル・ノルマル・シュペリウール周辺は様相が一変しました。兵隊を載せたトラックがゲイ・リュサック通りに駐車しているのに遭遇した時は、びっくりしましたが、かれらが持ち込んだ機材と引き続く作業を見て、また、びっくりですが、ともかく、この結果、デモ隊の武器庫が空に近くなったわけです。また、このころから街の商店などのひとたちのデモ参加者に対する態度が一変しました。デモ隊の破壊に対して非常に厳しくなってきました。デモ参加者が機動隊に追われたときに逃げ場がなくなってきたということです。一方で、中央での交渉は徐々に進み、社会改革、地方分権、大学改革など、ナポレオン以来といわれたフランスの社会制度の根幹にメスが入ることになりました。そして、極めつけが、ド・ゴール將軍のフランセーズ、フランセ（女性男性のフランス人よ）と始まり、アーム・ド・フランス・エテルネル、ヴィーヴ・ラ・フランス、ヴィーヴ・ラ・レピュブリーク（フランス魂、永遠なれ。フランス万歳、共和国万歳）で終わる退任演説だったと思います。

5.7 分析3 – 事後の誠実な処理

第三に、五月の出来事が社会的な規模が大きかったということはありますが、フランスは制度改革に真剣に対応したと思います。憲法改正にまでは踏み込みませんでした。丁度、迎えつつあったヨーロッパという思想との整合性もあり、タイミングであったのかも知れません。一方で、冷戦下の世界で、西側の主要国としての独自性をアメリカに対していかに主張し確保するかという課題があり、五月の出来事は、ド・ゴールの路線を修正せざるを得ないことをフランス国民が認めた反映でもあったと思います。少し時間は経ちますが、70年代半ば頃からのフランスの様子を見てみると、基本的には、このときの改革が有効に働いてきたと思います。ド・ゴール自身が主導した改革は憲法改正を伴い、アルジェリア問題を解決しましたが、概ね15年程度の有効性がありました。五月の出来事に伴う改革も、そんなものだと思います。改革の基礎になった条件の有効性はもっと早く失われてもいるわけですが、一方で、このときのフランスの改革の動機づけには、当時の日本の躍進傾向があり、更に、やがて台頭してくるに違いない中華人民共和国のことも念頭にあったに違いありません。いずれにせよ、五月の出来事にせよ、ポーランドの連帯運動にせよ、プラハの春にせよ、底流にはすべて繋がっているものがあるという認識が、国の指導者層の行動を制御していると感じ入りました。

5.8 分析4 – 原資料の収集と保管

第四は、アーカイブの努力です。五月の出来事で食堂探しに苦労しているときに、近くに住んでいた父の友人から何回か食事の招待を受けました。その中に、国立文書館の館長がおり、この方は何代かにわたるパリのブルジョワでお話自体興味深いのですが、特に、騒乱真っ只中の時期のときに聞いた話が印象的でした。それは、館員を挙げてとにかく配布されているピラ類の収集をしているということだったのです。もちろん、他の行政機関や外国公館も情報収集の総力を挙げて事件の推移を追い、分析を続けていたと思いますが、国立文書館は、とにかく原資料という生のデータを集め、加工せずに保存するという作業をしていたわけです。もちろん、分析したり、比較したりする作業は後世の歴史家のものですが、一次資料が公的図書館にしっかりと保存されているからこそ、真面目な研究が成り立つわけでしょう。個々の私的研究者の水準では、資料の選択に恣意性を排することは困難でしょうから、公的機関である国立文書館が同時期資料を収集し保管しておくことは基本的なことに違いありません。18世紀の末以来、ほぼ30年に一度は国家的な危機に遭遇し、乗り越えてきた国の根底にはこういう習慣があるのだとつくづく思いました。

五月の出来事は、フランス滞在が半年余りになり、漸くこれからという時期だっただけに、留学目的という点では障害になったかも知れませんが、わたくしのような俗人にとっては、実に、いろいろなことを考えさせてくれる機会になりました。この経験が後々役に立ったかと問われると、それはあやしいのですが、ものの見方には確かに影響しています。

5.9 プラハの春の終焉

前後しますが、この年の早春には、東欧圏の不安定化に関連して、ワルシャワ条約諸国の軍事演習がソヴェト連邦とチェコスロヴァキアの国境で展開されていました。北大西洋条約機構（NATO）も警戒態勢に入っていました。フランスも加盟国でしたが、ド・ゴールの方針で軍事的には独立という姿勢でした。問題は、いつワルシャワ条約軍が介入するか、その場合、西側の反応によっては東西ドイツ国境まで戦車隊が進出するかどうか、チェコスロヴァキアのソヴェト側の国境を越えてから西ドイツ側の国境線まで、どのくらいの時間で到達するか、また、フランス政府は何を考えているのか、というのが関心事であったと思います。当時は、エコル・ノルマル・シュペリウールの食堂でも学生食堂でも、学生たちはラジオを持ち込んで、ニュースを聞き、議論しながら食事をしていました。特に、エコル・ノルマル・シュペリウールの学生たちはフランスのエスタブリッシュメントに近い連中が多かっただけに、持っていた情報の質も高かったように思います。こういう様子は、ゼネストで食堂が閉鎖されるまで、続きましたし、ド・ゴール退陣の後始末でフランス国内がごたごたしている間も基本的には続いていましたが、恐らく、もうワルシャワ条約軍の介入がないだろうと思われた八月の半ば過ぎに、戦車隊が入り、プラハの春は終わりました。父がいた1930年代半ばの欧州とは比べ物にはなりませんが、不安定こそ常態ということは変わらないと思います。

6 帰国後

6.1 北海道大学 → 九州大学

五月の出来事収束後の一年は、郊外の大学都市に寄宿し、何をなすべきか考える傍ら、奇妙な論文を書き、帰国しました。その後、縁あって北海道大学理学部に職があり、15年近く札幌で過ごしてから福岡の九州大学に来ました。その間、アメリカの中西部インディアナ州ウェスト・ラフィエットにあるパデュー大学で一年過ごしました。エコル・ノルマル・シュペリウールの人脈が働いたようなところがあって、余り自慢にはならないのですが、経験にはなりました。何年か前に久し振りに立ち寄り、引退したかつての知人を訪ねました。大学の中がずいぶん様子が変わっているのにびっくりしました。

根岸先生のおられるところで、あの折に、ついでにというか、お訪ねしとけばよかったね、と、受賞会見を見ながら家内と話したものです。そのときの本当の用務先は隣接州の別の大学だったのですが、そこでの食事中の雑談で、教員が、

アメリカの大学は今やビッグビジネスだ、商品は学位で、顧客は中国人やインド人だ

と言っていました。かつての滞在先を訪ねてみて、本当にそうなのだなと思いました。残念ながら、以前は専任日本人ファカルティが数人、わたくしのような客員ファカルティが数人、日本からの大学や企業派遣の研究者や大学院留学生が多数滞在していて、大学のあるウェスト・ラフィエットにいた日本人だけで結構な集会規模になりましたが、今はどうなのでしょう。後で、調べたら、高校時代の友人が、特任教授として今も在籍しているようではありませんが。

パデュー滞在中も、心理的にそう余裕のあることではなかったのですが、母の従兄をニューヨーク郊外に訪ね、何泊かしました。この人の両親は、わたくしが小学生だった頃、実家にほぼ一年滞在していたことがあるのですが、あれは一体何だったのでしょうか、退職後の旅行だったのか、サバティカルだったのか、今から半世紀以上昔の話で、事情を知っているはずの関係者は生き残ってはいないでしょう。若いときに渡米し、稀にしか日本に戻ってこない大叔父とその奥さんを囲んで、わたくしから見て母方の曾祖母の一族が集まって会食したのは、そのときが最後だったと思います。ともかく、大叔父には、日米野球、日米水泳、大相撲と連れて行ってもらった記憶があります。

6.2 工学部

九州大学では工学部におりました。工学部とはどういうところか全く知らず、共通講座に参りましたが、予想以上に面白いところでした。理学部と工学部の文化的な相違も体感しましたが、「工学部」という存在は日本独特のものではないか、と思います。産業と密接な関係にあることも善し悪しがあって、産業には寿命があり、当然、産業密着型の学科には寿命があるというのは驚きでした。とは言え、大学の教育・研究は、基本的に非常に経費が掛かりますし、私立大学も含め、経費の調達面で国の関与は決定的ですので、合理的に見える説明が要求されます。したがって、過去のものや烙印を押された産業関連の学科が、そのままでは生き残れないのは仕方がないのですが、その際、支配している時間単位や哲学を論ずる習慣が日本の行政にはないようなのは大変残念だと思います。工学部のよさは、会議が多かったのですが、情報開示が存分になされていることと系統的な情報流通のための構造がしっかりとしていることだと思います。この点は、すべてのとは言いませんが、理学部系は余りよくないようです。

九州大学工学部にいたとき、発想の動機は所属教室での勢力関係打破というような私怨に近かったのかもしれませんが、「学際語として数学」というべきものを展開し、大学全体をカバーするような数学系の研究教育の独立組織を作るべきだと思い、雑文を書いたり、若干の運動を致しました。大学制度がいろいろといじられている時期でもあり、教養部廃止や大学院重点化などが話題になっていましたが、工学部はこの手の改革への関心が強く、当時の文部省や科学技術庁、通商産業省、学術会議などが発信する詳細な情報が得られ、他方、九州大学独自の課題として、キャンパス移転がありました。このような工学部の情報量がなければ具体的に検討・企画してみようとは思わなかったアイデアだろうと思います。こういう一連の動きの中で、九州大学大学院数理学研究科の設置に漕ぎ着けましたが、理学部の習慣に基礎を置いた運営組織になり、情報獲得や流通には問題が残った他、数学者だけの構成だったためか、関心範囲が狭くなってしまい、「学際語としての数学」などは、純粹の数学研究者が評価しないことでもあり、話は簡単ではないことを思い知らされました。

6.3 数学者集団と戦略性

類似の研究科は、東京大学大学院数理科学研究科、名古屋大学多元数理科学研究科とありますが、東京大学が先行し、九州大学は学内での数学者の信用は余り高くなかったと思いますが、それにもかかわらず、東京大学の事例と工学部の支持でそう遅れることなく設置に漕ぎ着けました。東京大学の研究科設置の当事者たちは、当時の総長補佐を兼ねており、東大内での有力者だったに違いありませんが、研究科のアイデアそのものは、事前に意見交換もしており、九大、つまり、わたくしの夢の方が早かったろうと思います — 東大関係者は公式には認めませんが、名古屋大学の事例は知りません。当初設計の堅固さや母体組織の伝統などの関係で、鼻屑目かもしれませんが、九大の組織が今でも一番しっかりとしているように思います。最近、数理学研究院（今の九大では研究科を研究院と言います）から研究所が分離しましたが、教育上の機能は変わらないはずで。

6.4 カルチャー・ショック

前後しますが、わたくしがフランス滞在を始めた頃、結構カルチャー・ショックを覚えました。それ以来、関心の対象としてずっと温めつづけていることがあります。後に、ポルドーにいたときには地方都市の普通の民家に下宿しましたが、却って鮮明に意識の対象になったのかも知れません。それは、道路や道路と住宅の関係で、これらは日本の相当する例と比べると、際立った違いがあり、世界的に見ても日本だけが例外らしいと思います。どうしてな

のか、それが関心事になっているというわけです。他にも、ニュース原稿の作り方、特に、映像の使い方の違いも気になりました。後述しますが、これは意外と重要なことかも知れないと思っはいます。

カルチャーショックということだけに関して言えば、最初に東京からパリに着いたときのショックは大きく、上述のように、いまだに後を引いています。東京から札幌は同じ東日本ですし、意外なことに、札幌からアメリカ中西部に行ったときもほとんど感じませんでした。札幌から福岡に移ったときは、明確にカルチャーショックがあり、自分は日本というものを知らないなとつくづく思いました。変な話ですが、後年台湾に旅行したとき、妙に納得ができて、文化や民族が違うはずなのに、大阪－福岡－台北と西に連続的に滑らかな変化が見られるような気がしました。

7 これからの本校

7.1 校長になる

とまれ、わたくしの三流の数学者人生に一段落が付き、ぶらぶらしているところに、突如、本校の校長にならないかという話が舞い込んで来ました。福岡で男の子二人を育てましたが、久留米大学附設中学・高等学校には全く関心を抱いて来なかったし、教員免許もありませんので、一体務まるものかどうかわか信は持てないまま、浪人生活とひとまず別れた次第です。話を持って来られたのは、附設の古い卒業生で、九大時代、会議などで何回かご一緒したことのある人ですが、母校の校長になるために大学を定年前に去られています。先生から、本校は

英才教育をするところであり、エリート養成の場である

ことを肝に銘じて置くように申し渡されました。内容と実質が重要なので、標語として表に出すことかどうかは別ですが、一応了解致しました。これは、本校の教育方針と深く関わることですが、一方、実は、わたくしは、校長になってから、校内外の公的な場で、本校が「英才教育をするところであり、エリート養成の場である」とは一言も口にはしていないつもりです。これらについては、後に詳しく論じたいと思います。

7.2 附設体験

ところで、わたくしが赴任した頃の附設の評判は、進学実績はあるが、生徒たちは自己中心的で、躰はなっていないと言った芳しくないものだと聞いています。わたくし自身は、赴任前は、附設の制服も校章も知りませんでしたし、実際に、生徒と遭遇していたとしても認識できるような状態ではなかったと思います。§3.2 に苦情の一端を示しましたが、生徒たちは

「勉強さえ出来れば何をしてもいい」と思い込んでいる「頭でっかちの怪物」

という風評はあったようです。残念ながら、そういう生徒が皆無ではないことは認めなければなりません。しかし、大体において、決してそんなことはない、今は断言できます。もとより、生徒たちは、いかに素質に恵まれているとしても、社会的な振舞い方については何も知りません。「勉強さえ出来れば」と嘯いても、「勉強が出来る」ということの意味さえ実は知らないでしょう。こういうことは教えられていなければ絶対にわかりません。実際に常時従えるかどうかは別として、従うべき規範というものがあり、それを知らなくて困るのは当人だということは、絶対に、教えておかなければなりません。教えるのはもちろん大人であり、重要性を強調し、常々推進するのは、結局のところ、校長ということになります。結果から判断して、この点で、少し前の附設には不十分なところがあったのだらうとは言えると思いますが、附設の長い伝統に不用意なまま手を入れて混乱だけが残ったというようなわけには行きませんから、どう改善すべきか非常に悩みました。

ところで、わたくしの最初の数ヶ月の附設体験は決して悪いものではなかったと思います。この間の印象が大変よく、若干の偏見の対象の未知の学校でしたが、大変気に入って、好きになりました。何と言っても素晴らしい生徒が居るのです。赴任してすぐに学校祭『男く祭』があり、生徒会のインタビューを受けました。インタビュワーは素晴らしい青年でした。しばらくして、交替した新生徒会の連中と会食し、ざっくばらんにいろいろと話しているうちに、かれらが素晴らしい素質に恵まれていること、他方、赴任前の附設で強調されていたと思われる価値観に疑念を呈していることもわかりました。

ところが、しばらくして登校中の中一の生徒たちの電車内での感心しない様子を目撃する機会があり、とにかく出来る範囲で何かしようと思い、中一の通学生だけが、グループを作ってもらい、グループ毎に昼休みに食事をしながら、附設生のプライドなどを論じたのですが、特段、そういうものを意識しているわけではなさそうだとわかったただけでした。本校は、地域のトップ校ですから、生徒たちは屈折した心情はないけれど、一種の規範性を具現しているという自覚もないようでした。

赴任時に気付いた、こういう一連のことは、当時の附設の大人たちの問題が生徒たちに投影されていた部分がかかなり大きかったのだと思います。何が問題だったのかというと、これも経過から判断して、「英才教育をするエリート養成の場」であるという、具体的には何をすべきなのか判然としない標語のせいではなかったかと思います。これを表立っては口にしなくなったことも、ひょっとしたら「改善」の一助にはなったと思います。

しかし、自分で言うのも変ですが、少しでも「改善」したとすれば、それは校長のプレゼンスの増大によるものでしょう。校長室から出て歩き回っていますが、これは最近十年の校長はしなかったことなのだそうです。時間的

になかなか思い通りには実行できませんが、校舎内巡回を一日一回はしたいと考え、心掛けています。授業を覗き、校舎内の汚れ具合を見、必要なら、清掃もしています。もちろん、生徒たちとすれ違えば、向こうが押し黙っていても、おはよう、こんにちは、さよならと声を掛けます。式辞類も、話しかけるように原稿を作ろうと心掛けています。そして、自明なことも、決まり文句的なことも言いません。毎回これを実行するのは大変で、出来不出来はありますが、例文集などは見たこともありません。そうして、確かに手応えを感じています。

もちろん、このようなことは附設だから意味があるかも知れないことです。三流の数学者であった校長が身体を張って、「この程度の男でもこのくらいのことはして見せている、君たちならもっと立派なことができるだろう」というメッセージの発信を心掛けているというわけなのですが…。

7.3 エリート養成とは何か

日本にはエリート養成校はないと言われます。念頭にあるのは、イギリスのパブリック・スクールであったり、フランスのグラン・ゼコルであったりしますが、この手の議論では、そもそもエリートとは何であるかということが論じられることはないようです。似た言葉にエスタブリッシュメントというのがあります。エスタブリッシュメントこそ本来のエリートだと思いますが、こちらは、一国の支配層、つまり、政権幹部や影響力の強い企業の経営者たちの構成する階層的な人間集団を意味するようです。日本だったら、代議士や高級官僚、主要メディアの幹部や大手企業の経営者たちがエスタブリッシュメントを構成しているのだと思います。他の国だと、これらの人たちに加えて、高級軍人や場合によっては高位聖職者が加わるだろうと思います。中国の場合だったら、共産党の幹部がそうでしょう。わが国の二世代議士の例などを見ると、多少の出入りはあっても、エスタブリッシュメントは比較的安定した社会階層になっているようです。構成原理は一に経歴ですが、人脈や婚姻関係その他実力では測れない部分も関与しているでしょう。しかし、実際に国を動かしているのがエスタブリッシュメントですから、かれらが良質であり、かつ、常に強い緊張感に晒されているようでない、国が持ちません。エスタブリッシュメントこそ「責任感のある勇士たち」に構成してもらわなければならないと思います。そういう意味では、エスタブリッシュメントへの良質な参入者を育てるという活動には意味はあるでしょう。しかし、エスタブリッシュメントだけでは国が成り立ちませんし、本校のような学校にお子さんを託そうとする保護者の方たちの想いは、お子さんが安定と尊敬を獲得できる生活をおくることであって、そういう職業が今後もあるかどうかは別として、将来、お子さんがリスクの大きいエスタブリッシュメントの一員になることではないかも知れません。

日本の場合、エスタブリッシュメントの主要な供給元は、東京大学法学部、同経済学部、同工学部や慶応大学、早稲田大学などの出身者ですが、これらの学校を出たからと言って、エスタブリッシュメントに属すわけではなく、また、これらの学校以外の出身者でもエスタブリッシュメントに属している人は多数います。してみると、「エリートを養成する」ということは、体系的な教育だけでは済まない部分があるようで、むしろ、結果としてエリートが輩出している学校があれば、雰囲気か何かに秘密が隠れていると思うべきでしょう。本校の卒業生は、残念と言うべきかどうかは別として、エスタブリッシュメントに属している人は多いとは言えません。この意味では、本校は(厳格な意味での)「エリート」の養成に対しては中立的であったと言ってよいでしょう。この点については、後に若干の補いをしますが、これからも基本的にはこの姿勢でよいのではないのでしょうか。わたくしが「本校はエリート養成の場である」とは表立って口にしようとは思わない理由でもあります。

7.4 エリートと社会的指導層

本校の卒業生の実際は、全体のほぼ三分之一が医師であり、しかも、多くが地域診療に当たっています。さらに、かれらの子弟も本校に多く、いわば、地方の医師階層の再生産過程に組み込まれているところもあります。また、医師は、安定と尊敬とさらには収入の獲得が保証されている職業と見られており、特に、地方では高い人気の的です。当然、医師家庭以外の出身者の医師志望も多く、実際、本校の生徒には、そういう人たちが少なくありません。しかし、このような医師は職業上の視野の性質もあり、厚生労働省の上級医務官僚か主要大学医学部教授でもない限り、§7.3 で述べたエスタブリッシュメントには属しません。また、現場の医師で自分たちはエリートだと認識している人はほとんどいないと思われれます。しかし、国家に対する殊更の貢献かどうかはともかく、社会に対しては本質的な貢献をしていることは間違いありませんから、これらの人たちを養成することは本校の建学の趣旨と全く矛盾しません。

幸い、最近の医学部教育や入試は大幅に改善されており、医師志望者が本気であって、しっかりした覚悟があれば、少なくとも本校の生徒の場合だと、ごく一部のブランド医学部にこだわらない限り、しかるべき医学部医学科に合格できるのではないかという印象を持っています。他方、医学教育には長大な時間と多大の経費が掛けられていること、一人前の医師になるためには医師免許取得後にもさらに長い訓練期間が必要とされることを考えると、医学科志望者には浪人するなどという贅沢は本来許されてはいいないように感じます。この点で、わたくしが耳にした最悪の事例は、京大医に現役不合格(前期)、九大医に合格(後期)、しかし、入学せず、翌年京大再受験で不合格、翌々年京大医合格というものです。社会的風潮や動機付けなどの観点を加味

すると一概に否定的には扱えないと言うものの、そして、この後一念発起していい医者に成長してくれるだろうとは思っているものの、何という馬鹿者を作り出してしまったのかという最初に覚えた感慨は間違っているとは思いません。わたくしたちは本当に大事なことを子どもたちに伝えていないとつくづく思います。

一方で、学校としての立場を考えて見ますと、卒業生が特定の進学先や特定の職業分野に偏っていることは、学校自体を非常に脆弱にします。一般社会の職業分布と卒業生の職業分布の整合度というべきものは学校の社会的な影響力の指標になるのではないかと思います。この観点からは本校には大きな問題があるわけです。医師はエリートではないかも知れないとは言っても、社会的な指導者であることは間違いありません。本校の建学の趣旨との整合性で言えば、本来は、社会的な指導者を目指す人たちを育て上げるべきであって、そういう生徒たちの中に医師志望の生徒が混じっているという理解ができることが適当だと思います。そして、校内には、生徒たちの文系進学者を増やし、特に、東京大学教養学部文科一類を目指させなければいけないだろうという意見が強くあります。東京大学にこだわるべきかどうかは別にしても、わたくしは、このような方針には基本的には賛成です。

人間としての幅を考えると、単科大学よりも総合大学が好ましく、例えば、文系学部進学でも理系学部の学生たちとの交流ができ、理系学部でも文系学部との交際ができるところが望ましいと思います。東京大学や京都大学などを始めとするいわゆる旧帝大はこの点でも問題はありませぬ。ところが、受験関係機関などのランク付け情報は、顧客層の厚い首都圏の地域性への考慮を優先して発信されていますから、本校のような地方の進学校は気をつけて利用しなければいけないものなのかも知れませぬ。さらに、ランク付け情報では、生徒たちの人間的成長の可能性を加味しているわけでもなく、また、それぞれの大学の大学院などを籠めた総合力も考慮外のようなのです。生徒たち一人ひとりの将来の可能性を評価しながら、適切な進路選択ができるかどうか、これは学校だけでなく生徒本人や保護者にとっても課題ですが、参照できる情報の質に問題なしとはしないように思います。

7.5 生徒に望むこと

建学の趣旨は抽象的です。どうしたら、そこで望むような、そして、それを補ったような「責任感ある勇士」に生徒が育つのでしょうか。勉強は必要ですが、それだけでは十分ではありません。自分自身を信じ、かつ頼れるような人間に育て上げるように、それぞれの生徒が努めることと言ったらいいのでしょうか。これでもまだ抽象的です。常に、自分の力を確かめ、それを磨いておくことが大事だと思います。自分自身の目で見、自分自身の耳で聞き、自分自身の手で触り、その上で、自分自身の言葉を発信する、そういう

努力を続けることです。これは自己中心的な世界を作れという意味ではありません。他人の言説に接したとき、その根拠論拠を抜き出して、それらに沿いつつ自分なりに再構築した描像を作れということです。こうすれば論拠に不足があるかどうか判断できますし、論旨に混乱があれば別な描像が得られてしまうでしょう。要するに、他人の言説を相対化し、鵜呑みにするな、ということです。こういう繰り返しの延長上に、自分自身で正しくものを認識することができる力が育ってくるはずで

す。こういったことのためには相応の努力が不可欠です。見、聞き、触るのにも訓練が必要だし、正しい基準がなければ、目や耳に入っても、見えも聞こえもしません。しかし、しっかりとした基準と簡単な訓練を経れば、いたるところに新しいものが見え、聞こえて来ます。いわゆる常識や通説とは違うものが見えてしまうかも知れません。しかし、適切な行動の前提は正しくものを認識することです。生徒たちには、こういう力を身につけてほしいと思っています。

8 ささやかな補遺

8.1 カルチャーショックの事例二三

カルチャーショックは自分自身でものを認識するという力を発露するのにはいい機会かも知れません。例えば、わたくしが始めてフランスに行った頃、テレビ・ニュースはひたすら喋りまくるアナウンサーの正面像だけを映しており、当時の日本の現場映像などを多用した構成との相違に驚きました。わたくしなりの解釈は、表音文字の世界では、言語情報は線形的に流れるべきものという思い込みがあり、画像情報の利用は思いつかないのだろうが、日本型の漢字かな交じりの言語世界は二次元情報の使用を当然としているからではないか、というものでした。この手の話題の場合、当否の判断をどうするのか、それさえわからないとは言え、もっともらしいとは思いませんか。

もっと真面目なのは、道路と区画との関係です。欧米に行った人はお気づきだと思いますが、西欧の都市の道路には、どんな小さいものでも名前が付けられており、それも地域や国の歴史に関わりの深い人名や地名が多いと思います。中西部のアメリカの大学にいたことがあると述べましたが、そのとき、大学院生用の寄宿舎が立ち並ぶ一画の道路に、太平洋戦争時の提督や将軍たち、ニミッツとかドリットル、マッカーサーなどの名前が付いているのを見て、やはりそうなのかと思ったことがあります。パリの場合だと、ゲイリュサックやデカルトは人名ですし、サンジャック、サンミッシェル、サンジェルマンは聖人の名です。そして、戸口番号が一方が偶数番、他方が奇数番になるように振られています。地図の検索も、道路と戸口番号で行われます。これに対し、日本の場合は、道路には原則名前は付いておらず、比較的大きいものには、通称というか、便宜上の名前はありますが、地図の検索で

利用されることはありません。ただし、京都の市街は例外です。京町屋の構造が西欧のパティオ様式に通ずるのも不思議なことです。彼我の違いはどこから来るのか、わたくしはとても気になります。

似たようなことでやはり気になるのは、地図帳の索引の形式です。欧米出版の地図帳の場合、しかるべき水準以上のものは、地名索引は地名に該当する地点の経度緯度（絶対座標）によって行いますが、日本の場合は、地図帳のページ数と各ページのブロック区分けの記号の指定（相対座標）が普通だと思います。わたくしは、この日本の習慣は感心しないものと考えています。理由は、自分たちの位置を正しく把握することの障害になるからです。例えば、福岡市と高知市の北緯がほとんど変わらないのですが、日本の地図帳の索引の情報だけではなかなかわかりません。このことは指摘されてから、実際に、別表で両市の北緯を調べて確かめました。

日本で常識化されているけれども、よく考えるとおかしいという習慣は他にもいろいろとあると思います。もちろん、日本の方がいいというものも多いでしょう。

索引

- 安定と尊敬を獲得できる生活, 20
- 為他, 4
板垣政参先生, 4, 5
為他の気概, 5
- 英才教育, 18
エコル・ノルマル・シュペリウール, 11
エスタブリッシュメント, 20
エリート, 20
エリート養成, 18
- 男く祭, 19
オリエンテーション, 3
- 学際語としての数学, 17
学生スト, 11
学校歴, 3
カルチャー・ショック, 17
- 九州大学, 15
- 苦情の電話, 7
久留米大学, 5
- 建学の趣旨, 4
- 校歌の歌詞, 4
公正性の実現と維持, 8
校長のプレゼンスの増大, 19
五月の出来事, 11
国立文書館, 14
- 三流の数学者, 18
- 式辞類, 6
自主自律, 7
正法眼蔵, 4
所得倍増計画, 10
- 筋の通った愚直さ, 6
- 制度改革, 14
責任感ある勇士, 8
全共闘運動, 11
- 総合的な人間力, 9
- 東京大学, 10
東大医学部紛争, 11
- パデュー大学, 15
原巳冬先生, 4
- 東日本大震災, 2
- 不安定こそ常態, 15
不安定な日本と世界, 6
プラハの春, 11
フランス政府給費留学生, 11
文化大革命, 11
- ベトナム戦争, 11
- ホームページ, 5
北海道大学, 15
- マオイスト, 11
- 無責任な卑怯者, 8
- 山猫スト, 11
- 予定調和, 6
予定調和を信じこんでの安易さ, 9
- 理想の人間像, 8
- 連帯運動, 11
- 六〇年安保闘争, 10
論語, 7
- 和而不同, 7